

ベケット研究会第 54 回例会 発表要旨

2019 年 12 月 14 日(土)

青山学院大学渋谷キャンパス

エンドゲームの中で

赤阪健太郎

新訳『エンドゲーム』を読むと、終盤戦とはひとつのものごとの終わりではなく、いくつかのことが終わりつつありずっと続いている同時性を示していることに気が付く。ポストモダンはその自体モダニズムの終盤戦ともいえるが、現在が完全にポストモダンな状況というのでは当然ない。『ゴドーを待ちながら』は原発問題とリンクして近年語られたが、例えば反原発運動自体は環境問題を含め（レイト）モダニズムの理念というべきもので、モダニズム・ポストモダニズムの双方が共にずっと終わりつつある現在の同時性をエンドゲーム、チェスの終盤戦だととらえたい。

平成生まれの世代としては、ハムの「なんて日だ！」はお笑いコンビバイキング小峠のギャグ、クロヴのかわいそうさは幼いころの芦田愛菜のドラマでの演技のような悲哀を感じる。それ自体つい深遠な解釈（アウラの捏造）を試みようという文学の閉鎖から奔り抜けようという非アウラ的な複製時代のベケット像といえるものだろう。

12月の発表では新訳の理念に即して劇中の運動を2つ、ないしは4つの運動に分類してエンドゲームについて論じたい。過去、新旧あるいは同時代の、または未来についてである。

『マロウンは死ぬ』におけるホロコーストの記憶とモナド的想像力

森尚也

「たぶん救急車で」ここに運ばれた。意識を失って、気がついたらベッドに裸で寝ていた。後にマロウンと名乗るその語り手が、「とうとうもうじきわたしは完全に死ぬだろう」といい、死を「待っているあいだ自分に物語をしてきかせよう」と紙と鉛筆で記されていく手記が『マロウンは死ぬ』¹である。少年サポスカットの生活をめぐるとりとめもない話、途中でうち捨てられていく無意味な話、とりわけ「なんて退屈な」と繰り返し挿入されるマロウンの声は、『マロウンは死ぬ』をスターンの『トリストラム・シャンディ』やディドロ『運命論者ジャック』のように逸脱こそがむしろその中心にある、小説のパロディと

しての性格を前景化させる。しかしそこで納得してはいけない。マロウンが差し出す仮面に騙されてはいけない。この小説には、その背後に読み込むべき二つの大きな枠組み、すなわち歴史的イベントと形而上学的システムがある。マロウンがはじめに計画をたて、結局「物語を五つ：現在の状況、物語3つ（人間〈男と女〉、動物〈たぶん鳥〉、物〈たぶん石〉）、財産目録」だと予告する。実はこれがだまし絵のように秘められた政治的、形而上学的な物語の骨格を担っている。

本発表では、ベケット批評に風穴を開けたエミリー・モランの画期的労作『サミュエル・ベケットの政治的想像力』(Emilie Morin, *Samuel Beckett's Political Imagination*, Cambridge, 2017)が開示したホロコーストの証言としての『マロウンは死ぬ』の解釈を紹介し、その一方で『マロウンは死ぬ』にはライブニッツのモナドロジーが蜘蛛の巣のように張り巡らされているという筆者のこれまでの主張がテキストのなかで、モランの主張とどのように折り合うのか対峙させてみたい。例えば、「地下室が上に下にいくつも層をなしていて」自分が何階にいるのか分からないマロウンの部屋、バロック的建物は、筆者にとっては、ライブニッツが『弁神論』最終章で描いた無限のピラミッド、つまり無数の可能世界のひとつである。ところがモランにとってそれはナチス傀儡のペタン政権下でユダヤ人を一時的に拘留するのに使われたパリ郊外のドランシー・キャンプ、すなわち歴史の特定の時期に出現した個物であるという²。意識を失っているあいだに運ばれたマロウンの証言には、拷問、移送、監視を示唆する表現が多いが、それは隠されたホロコーストの証言であるとモランは読み込む。

その一方で、筆者はマロウンのいう3つの物語（人間、鳥、石）のすべてにそれぞれライブニッツのモナドロジーが埋め込まれていることを指摘するだろう。内的観念、モナドの無窓性、ヴォルテールを経由した予定調和批判、無意識的知覚である微小表象や、不可識別者同一の原理、連続律などである。これらはすべて関わり合っているのだが、とりわけユダヤ人のジャクソンがペットの鸚鵡ポリーに、あるラテン語命題を覚えさせようと苦労する鳥の物語には、ロックとライブニッツの人間の知性をめぐる大きな対立が、戯画化されると同時に、ベケットによる知性批判も読み取れる。

さらにモランが触れていないランバート家をめぐる数々の動物の殺戮物語も、筆者は重要な物語の要素だと考える。それはモナドロジーの観点からすれば、下位のモナドの話であるが、モランやジャン＝ミシェル・ラバテの観点をとってみるならば、そこにはホロコーストの証言が陰画として埋め込まれていることが分かる。そしてそれが伏線となって、最後の『マロウンは死ぬ』の大団円、すなわち壮絶なマックマンたちの殺戮場面と同時にマロウンの死の変容に繋がることを指摘したい。

¹ 『モロイ』『名づけえぬもの』とあわせて1940年代後半に一気に書かれたベケット小説三部作の第二作である。最初はフランス語 *Malone meurt* (Minuit, 1951) で出版され、著者による英訳 *Malone Dies* は Grove 社より 1956 年に出版。

² ジョイスサークルの古参メンバーであるユダヤ人ポール・レオンは、ベケットとも友人で、レオンが逮捕される前日（1941年8月）にベケットと路上で会っていた。ベケットは逃げるよう忠告をするがレオンは息子のバカロレアが明日あることを理由にしぶり、逮捕された。レオンはまずドランシー・キャンプに送られ、最終的にアウシュヴィッツに向けて移送される間に亡くなった。ベケットのレジスタンス運動参加は、レオンの逮捕がきっかけのひとつとなった。